日本遺産
JAPAN HERITAGE

弥次さん喜多さん

東海道駿州の旅

弥次さん喜多さんの珍道中
『東海道中膝栗毛』
浮世絵と五十三次
駿州東海道紀行

特集

弥次さん喜多さん 東海道 駿州の旅

庶民文化が花開いた江戸後期、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』や歌川広重の『東海道五十三次』などの文芸や芸術作品は、人々を東海道の旅へと誘った。

江戸・日本橋を起点に、京都・三条大橋までの五三の宿場に加え、伏見・淀・枚方・守口と大坂まで続く計五七の宿場で構成された東海道。そのうち静岡県内には二二宿が置かれ、中でも県中央部の駿州（駿河国の別称）には歴史ある宿場町、風光明媚な名所、街道の名物が集中している。また、十返舎一九は府中（現在の静岡市葵区）出身であり、『膝栗毛』の弥次郎兵衛も府中、喜多八は江尻（現在の静岡市清水区）出身として設定されているなど、駿州は東海道の旅を語る上では外せないエリアである。

令和二年度、「日本初『旅ブーム』を起こした弥次さん喜多さん、駿州の旅」が日本遺産に認定された。そこで本誌では蒲原（かんばら）宿（静岡市）から藤枝宿（藤枝市）までを巡り、時空を超えた旅の楽しみを提案したい。

駿州の旅
日本遺産推進協議会
会長
北村正平さん
（藤枝市長）

駿州の旅の舞台である静岡県藤枝市・静岡市は、東海道のほぼ真ん中に位置し、古くから交通の要衝として栄えてきました。当地で育まれた歴史や文化、美しい景色は、日本初の旅ブームのきっかけとして、江戸の人々を旅へと誘っただけでなく、令和２年には「日本遺産」に認定されるなど、地域の宝として大切に引き継がれ、今もなお多くの旅人を魅了し続けています。

交通アクセス

静岡市へは
- 東京駅・名古屋駅から東海道新幹線（ひかり）で静岡駅まで約 60 分
- 富士山静岡空港からバスで約 50 分
- 東名高速道路「静岡 IC」「日本平久能山 SIC」「清水 IC」
  新東名高速道路「新静岡 IC」「新清水 IC」「清水いはら IC」

藤枝市へは
- 静岡駅から東海道本線で藤枝駅まで約 20 分
- 富士山静岡空港からバスで約 35 分
- 東名高速道路「焼津 IC」より約 15 分
  新東名高速道路「藤枝岡部 IC」

日本遺産とは

地域の歴史的魅力や特色を通じて、日本の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」として認定する文化庁の制度

日本遺産

※ 1～33 は日本遺産構成文化財

駿州の旅
日本遺産推進協議会
副会長
田辺信宏さん
（静岡市長）

歌川広重の浮世絵に描かれた薩埵（さった）峠からの絶景や、十返舎一九（現在の静岡市出身）の滑稽本『東海道中膝栗毛』に登場する美味しい名物など、ここ駿州には江戸時代の旅を追体験できる楽しみがたくさんあります。また、東海道を整備し、江戸幕府の礎を築いた徳川家康公とも大変所縁の深い場所でもあります。ぜひ、魅力あふれる駿州の旅をお楽しみください。

参考文献：本多隆成『近世の東海道』（清文堂出版）、稲垣進一『東海道五拾三次 江戸のうんちく道中』（日本郵趣出版）、今尾恵介『地図で旅する東海道』（東京書籍）、鈴木晋一『東海道たべもの五十三次』（平凡社）、長崎健監修『歴史地図の歩き方 東海道五十三次』（青春出版社）、新田時也・志田威・中澤麻衣『東海道・中山道 旅と暮らし』（静岡新聞社）、安岡章太郎『東海道中膝栗毛―お江戸を沸かせたベストセラー』（世界文化社）、村松友視『村松友視の東海道中膝栗毛』（講談社）

解説

弥次さん喜多さんの珍道中『東海道中膝栗毛』

江戸時代のベストセラー『東海道中膝栗毛』（以下、『膝栗毛』）には何が書かれ、人々にどのように受け入れられたのだろう。『絵図に見る東海道中膝栗毛』（旅の文化研究所編／河出書房新社）などの共著がある石井正己さんに、話を聞いた。

石井正己（まさみ）さん

東京学芸大学教授、一橋大学大学院連携教授。日本文学専攻。最近の著書に『感染症文学論序説』（河出書房新社）、『旅する菅江真澄』（三弥井書店）がある

Q 『東海道中膝栗毛』はどのような作品ですか？

作者の十返舎一九は1765年、駿府の下級武士の家に生まれ、のちに大坂や江戸で暮らし、版元と組んで様々な本を出しました。『膝栗毛』初編が出されたのは1802年。内容は東海道を旅する弥次郎兵衛と喜多八のドタバタ劇です。「膝栗毛」とは、徒歩旅行なので「膝を栗毛の馬の代わりにする」という意味の洒落た書名です。

この作品はヒットし、一九は日本で初めて原稿料で生活するプロの作家になったといわれています。『膝栗毛』の誕生は、「滑稽本」というジャンルの文芸を生み出しました。古典を題材にした教養が求められるような作品ではなく、庶民の生活を生き生きと描いた作品で、当時の人々にとっては新鮮に映ったのです。『膝栗毛』を皮切りに式亭三馬の『浮世風呂』『浮世床（どこ）』などの滑稽本も生まれました。

Q 『膝栗毛』は人々にどのように読まれたのでしょう。

『膝栗毛』が刊行されたのは大衆文化が花開いた江戸時代後期。すでに出版文化は発達し、様々な道中記が出版されていました。名所の紹介や宿場間の距離、宿泊料などの情報が書かれたものはまさにガイドブック。また、出版物でなくても、個人的に書き留めた旅の記録も結構残っています。特に寺社参詣など「講」で行く団体旅行は、どのようにお金を使ったかという出納帳がつけられています。

18世紀後半になると各地の名所図会が出版されました。こちらは図版がたくさん入っているので見ていて楽しいですね。そして19世紀初めに『膝栗毛』が出るのですが、他の道中記や名所図会と違うのは、弥次喜多は俗物なので名所を訪ねることはほとんどしていない点です。松尾芭蕉は旅路で歌枕（※1）をめぐったり寺社を訪ねたりしていますが、弥次喜多はそういう真面目な旅には全く関心を示しません。ただ、名物については丁寧に書いているのが面白いですね。『膝栗毛』は旅のガイドブックというよりは、ロードノベルといえるのではないでしょうか。

Q 駿河国を経た後、旅はどうなるのですか。

東海道から少し外れますが途中で伊勢神宮に参詣し、そのあと京、大坂で正編はゴール。続編では四国の金毘羅様に行き、さらに安芸の宮島にも足を延ばす。帰りは中山道を通り、善光寺、草津温泉を回って江戸に戻るという壮大な旅行でした。

このように、江戸時代の人々は寺社参詣を目的として、あるいはそれにかこつけて旅をするようになり、道中、名所や名物を楽しみました。特に伊勢参りは誰もが「一生に一度は」と憧れる旅で、松尾芭蕉も『奥の細道』の旅に出た時、最終的な目的は伊勢の式年遷宮（※4）に行くことでした。

駿府城巽櫓（たつみやぐら）の前に建つ弥次喜多像

Q 弥次喜多は駿河国でどのような旅をしたのですか。

三島宿で護摩（ごま）の灰（※2）に遭い、お金がないので蒲原宿では旅籠（はたご）に泊まれず、木賃宿に泊まります。木賃宿は米を持参し、煮炊きに使った薪代（木賃）だけを払う安宿。ところが弥次喜多は米を持っていなかったので食事にありつけない。そんなことも書かれています。

木賃宿の同宿者には六部（ろくぶ）（※3）や巡礼がいます。旅の目的も人それぞれということがわかりますね。『膝栗毛』はフィクションなので、一九は旅の様々な風俗を話の中に盛り込もうとしたのでしょう。その土地の方言なども出て来るので面白いですよ。

安倍川では川越し人足にふんだくられましたが、恨みつらみを長引かせず、その後もだましだまされの道中。現代なら訴訟沙汰かもしれませんが、アクシデントを笑いに変えていく。二人とも反省しないので成長もしないダメ人間ですが、アクシデントがあっても「もうここで旅はやめよう」とはならず、旅を続けます。その逞しさは見習いたいですね（笑）。

※1　一定のイメージを伴って（吉野と言えば雪、桜、というように）、多くの人が和歌に詠んだ名所　※2　ただの灰を「弘法大師の護摩の灰で、ご利益がある」と偽って押し売りをして歩く詐欺師に由来し、転じて旅人をだまして金品を奪う泥棒のことを指した　※3　六十六部の略。書写した法華経を全国六十六箇所の霊場に一部ずつ納めるために諸国の寺社を巡り歩く行脚僧　※4　20年に一度、社殿と神宝を新調して旧殿の神体を移す伊勢神宮の神事

浮世絵と五十三次

天保四年（一八三三）から歌川広重が描いた『東海道五十三次』。その魅力と当時の人々に与えた影響を、静岡市東海道広重美術館館長の岩崎均史さんに聞いた。

静岡市東海道
広重美術館　館長
岩崎均史さん

1953年生まれ。国学院大学文学部卒業。1978年よりたばこと塩の博物館に勤務。主席学芸員。2014年より練馬区立石神井公園ふるさと文化館館長。2015年より静岡市東海道広重美術館館長。『広重と歩こう東海道五十三次』（安村敏信共著 小学館）等、著書多数

広重「東海道五拾三次之内 蒲原 夜之雪」（静岡市東海道広重美術館所蔵）

鑑賞のポイント

蒲原は温暖な気候のため、この風景は広重が作り出した虚構だと思われます。しかし、雪に埋もれる寒村の静かな夜が情緒的に描かれていて、広重を代表する作品となっています。

旅への欲望を視覚で満たす〝ガイドブック〟

江戸時代になり、幕府の政策として五街道が整備されました。道路を整備し、一里塚が設置され、宿場・間宿（あいのしゅく）（※1）・立場（たてば）（※2）が設けられ、架橋や渡し船なども整備されました。さらには、戦乱のない安定した政治状況や、同一度量衡による両替可能な貨幣の流通など、中世に比べ格段に旅をしやすい環境が整えられたと言えるでしょう。

しかし、それでも旅は命がけ。自由気ままに物見遊山に出かけられるようなものではありませんでした。それを裏付けるように、いかに命を落とさずに往来できるか、トラブルを回避するかが書かれた、旅のマニュアル本である『旅行用心集』（文化七年（一八一〇）八隅蘆庵（やすみろあん））がベストセラーになりました。また、通行手形がなければ関所を通過することができませんが、手形は、御用・飛脚や伝馬（てんま）、仕事（商用）の他は、名主や町奉行が認めた用件でないと発行されません。庶民の旅では、寺社参拝や湯治、奉公や婚姻などがありましたが、多くの人の署名が必要でした。さらに、東海道の往復には、晴天の場合で二八日間かかり、平均で五両（現代で三〇万円）程度が必要だったようです。

そうした状況の中で、広重の『東海道五十三次』は、人々の「旅をしたい。名所を見たい」という欲望を視覚で満たす〝ガイドブック〟として人気を得たのではないでしょうか。

※1 宿場と宿場の間にある二次的宿場　※2 休息する場所

広重の叙情的な作風が旅の空想を膨らませる

広重が版元である保永堂の竹内孫八から依頼を受け、最初に描いた『東海道五十三次』が、「保永堂版」と言われるものです。その後、広重は様々な版元から二〇以上の『東海道五十三次』を版行しましたが、保永堂版を超える作品のレベルのものはなかったと思います。保永堂版を手掛ける前の広重はそれほど人気のある絵師ではありませんでした。しかし、竹内孫八は、広重に五五枚もの絵を描かせた。最初は一枚ずつ販売していましたが、売れる絵と売れない絵が出てきたので、合本して販売するようになりました。そうしたことも、竹内孫八の手腕を感じさせます。そしてもちろん広重の叙情的な作風が人々の旅の空想を膨らませたということが人気となった大きな要因でしょう。広重は、四季や天候、気候、そして一日の時間帯（朝霧や夕景など）に変化をつけました。また遠景・近景も作品により変えています。それらを五五枚の中に散りばめることで、見る人を飽きさせない工夫をしていました。『東海道五十三次』（保永堂版）の版行により、広重は〝名所絵師〟としての立場を確立し、人気を不動のものにしました。庶民にとって、まだまだ旅が身近なものではない時代だったからこそ、東海道の名所を描いた浮世絵を眺め、名所や旅のイメージを膨らませ、いつかそこに行ってみたいと願う――。『東海道五十三次』は、そんな旅の夢を見させてくれるガイドブックだったのかもしれません。

広重「東海道五拾三次之内 江尻 三保遠望」
（静岡市東海道広重美術館所蔵）

鑑賞のポイント

広重がそれまで描いてきた風景画を思わせる作品です。他の作品では、旅人や住民を大きく描いていますが、人物を目立たせて描かず、広大な景色を俯瞰する魅力的な作品です。

静岡市東海道広重美術館

由比宿の本陣跡地「由比本陣公園」内に建つ。歌川広重の名を冠した日本初の美術館。広重の代表的な東海道シリーズ『東海道五拾三次之内』（保永堂版東海道）、『東海道』（隷書東海道）、『東海道五十三次之内』（行書東海道）の他、晩年の傑作『名所江戸百景』など風景版画の名品を中心に約1,400点を収蔵。毎月展示替えを行い、バラエティーに富んだ企画展を開催するなど、常に新しい視点で浮世絵芸術を楽しむことができる。版画摺り体験や浮世絵の基礎知識を学べるガイダンスコーナーもあり、“広重”や“東海道”をキーワードに江戸文化への理解を深めることができる美術館だ。

静岡市清水区由比297-1　TEL 054-375-4454　［入館料］大人520円　大高生310円　小中学生130円　［開館時間］9:00～17:00（入館は30分前まで）

駿州東海道紀行

静岡市から藤枝市にかけては、東海道の宿場町のうち八つの宿場町と、東海道中の難所と言われた二つの峠があった。現在もその面影を随所に残す歴史街道を、のんびりと歩いてみよう。

※本文中の太字は「日本遺産構成文化財」

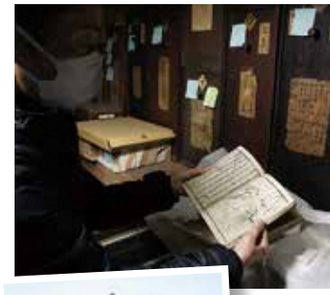
蒲原宿（かんばらしゅく）

街道沿いの人々の暮らしを伝える

旅の始まりはＪＲ東海道本線の新蒲原駅。駅から五分ほどで旧東海道の趣ある街並みへとタイムスリップできる。**蒲原宿**は広重の「夜之雪」（Ｐ５）で有名な宿場町。絵のように雪が降ることはめったにないが、街道沿いに山並みが連なる景色は江戸の昔のままである。

まずは「木屋江戸資料館（渡邊家土蔵）」へ。江戸時代初期より蒲原宿の要職をつとめ、農業の傍ら材木の商いを行い、江戸時代後期には問屋（といや）職（※1）を命ぜられた名家だ。天保十年（一八三九）築造の三階建ての文書蔵には江戸時代の歴史・芸術・民俗・交通に関する様々な資料が三千点あまり所蔵されている。

次に「**旧和泉屋お休み処**」へ。元は旅籠（はたご）で、現在は休憩所となっている。向かいは「蒲原宿西本陣跡」（邸内は個人宅のため非公開）。「**志田邸・東海道町民生活歴史館**」は江戸時代から昭和初期まで醤油醸造を行っていた家で、間口が狭く奥に長いという典型的な町屋建築（※2）。上から吊り下げる格子の板戸「蔀戸（しとみど）」が残る貴重な建物で、東海道に面した「店の間」は電気を引かず、江戸時代の暮らしぶりを伝える。志田家で使われてきた様々な道具や文献も展示する。



「木屋江戸資料館」（渡邊家土蔵）は土日祝のみ開館。個人宅のため在宅であれば対応可。問い合わせを。
静岡市清水区蒲原 2-2-30
TEL 054-385-3441

上／「旧和泉屋お休み処」
静岡市清水区蒲原 3-25-3
TEL 054-385-7111
下／お休み処の向かいにある「蒲原宿西本陣跡」

「東海道の宿場は五十三次の他、大坂への五十七次もあったということを皆さんにもっと知っていただきたい」と志田邸・東海道町民生活歴史館館長の志田威（たけし）さん。東海道・中山道等の宿場との交流も積極的に行う。写真下は蔀戸を上げる様子
静岡市清水区蒲原 3-19-28
TEL 054-385-7557

※１宿場の最高責任者で、人馬の賃銭の清算、休泊の世話などを取り締まる
※２間口の広さによって課税されていたため、町屋建築では間口が狭く奥に細長い家が多い

東海道中膝栗毛

蒲原

このコーナーでは十返舎一九『東海道中膝栗毛』から宿場ゆかりの話のあらすじを紹介しよう。江戸で起こした騒動の「運直し」にと、日本橋から出立した弥次郎兵衛（弥次さん）と喜多八（喜多さん）。トラブル続きの道中を経て、さて蒲原宿に到着すると…？

蒲原宿の本陣に大名一行が到着し、お勝手は配膳の支度でてんてこ舞い。喜多八はそのどさくさに紛れてお勝手に入り込み、女中を呼び止めて「おい、ここにも一膳」。喜多八はたらふく飯を食った上、持参した手拭いに飯を包んで弥次郎兵衛の元へと戻る。「おめえにみやげを持ってきた」「気が利いてるな。ああ、うめえうめえ…あ！これは手拭いだな。汚ねえ！」「ははは」。

本陣の台所に忍び込み、木賃宿では天井をぶち抜く

その晩、木賃宿に泊まった二人。同宿者の中に、寺社めぐりをする巡礼の男とその孫娘がいた。孫娘は17、８歳で、男いわく「この孫娘は、うちの娘が雷様との間に出来た子どもだ」と言う。興味を持った喜多八は夜、孫娘が寝る二階へ忍ぶが、間違えて木賃宿の婆の布団に入り込み、竹の簀（す）の天井を踏み抜いてガラガラドスン。小田原宿では五右衛門風呂の底を抜いて弁償したが、ここでも同じように弁償する羽目に。

十返舎一九『東海道中膝栗毛』（国立国会図書館所属）より、蒲原の木賃宿の場面

由比宿（ゆいしゅく）

当時の本陣を再現した「由比本陣公園」
静岡市清水区由比 297-1
TEL 054-375-5166

本陣跡の公園に美術館や交流館

蒲原宿から**由比宿**へ、街道沿いのあちこちの民家の軒先でみかんが売られていて、喉を潤してくれる。そして由比と言えば何と言っても桜えび。旧東海道沿いには桜えびの店が並ぶが、意外にも弥次喜多の道中には桜えびが登場しない。その存在は地元では江戸時代

から知られていたが、本格的な漁に発展するのは明治時代からだという。

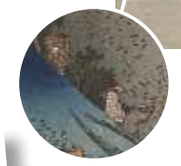
由比宿の面影を伝えるのは由比本陣跡だろう。本陣とは参勤交代をする大名など、身分の高い人物とその家来が休泊するための施設。現在はその跡地に表門や石垣などを復元した公園となっている。園内には「**静岡市東海道広重美術館**（P6）」や明治天皇が訪れた離れ座敷「御幸亭」、多目的施設「東海道由比宿交流館」もある。

本陣の向かいにある「正雪紺屋」は四〇〇年続く染物屋で、兵学者・由井正雪の生家と言われている。染物道具や仕事場が昔のまま残されており、手拭いなどの小物も販売している。

薩埵峠

旅人が息をのむ東海道中の絶景

由比宿から興津宿へ。「**東海道名主の館 小池邸**」は明治時代の建物だが、大戸、くぐり戸、なまこ壁、石垣などに江戸時代の名主宅の面影を残す。倉沢・寺尾地区は峠越えの要衝として、かつては旅籠が並んでいた。峠の麓には幕末、官軍に追われる山岡鉄舟を地下から逃したという歴史の舞台となったと



広重が描いた薩埵峠。こわごわと峠から景色を眺める旅人と、見飽きた風景といった様子の地元のきこりが対照的。「東海道五拾三次之内 由井 薩埵嶺」（静岡市東海道広重美術館所蔵）

薩埵峠までは由比宿から歩けば約１時間。車で行くなら車道の広い興津方面からの道がおすすめ

上／「小池邸」
静岡市清水区
由比寺尾 464-9
TEL 054-376-0611
下／倉沢・寺尾地区は宿場と宿場との中間に休憩のために設けられた「間の宿」（あいのしゅく）だった

名物 構成文化財

たまご餅

『東海道中膝栗毛』にも由比宿の名物として登場する「たまご餅」。現在、日本でただ一軒、「春埜製菓」で作られている。あんには北海道の赤小豆を、餅は江戸時代からの製法を守り、もち米を使わず上新粉（うるち米）のみを使用。独特の香りと歯ごたえで今も愛されている。

春埜（はるの）製菓　静岡市清水区由比北田 92　TEL 054-375-2310

名物

桜えび料理

国産の桜えびは全国でも駿河湾でしか獲れないという“海の宝石”。水揚げ高の約９割以上を桜えびが占める由比地区では、新鮮な桜えびを味わえる料理店も多い。漫画『美味しんぼ』にも登場した「くらさわや」では自慢のかき揚げや釜めしなど様々な桜えび料理を楽しめる。

くらさわや　静岡市清水区由比東倉沢 69-1　TEL 054-375-2454

薩埵峠～興津の道は、みかん畑の中を歩いて行く

いわれている茶屋「望嶽亭藤屋」がある。

急坂を登り、街道の難所と言われた「**薩埵峠**」へ。峠の山は駿河湾へとせり出しており、現在、この狭いエリアに東海道本線、新幹線、国道一号、東名高速道路という交通の大動脈が集中している。江戸初期までは波打ち際を通る「下道」しかなかったが、危険なために明暦元年（一六五五）に山腹を開削して「中道」が、更に後年、山の向こうに「上道」も整備された。本誌の表紙のとおり、峠からの富士山と駿河湾は絶景。広重の浮世絵のままの世界が広がる。

興津宿

家康ゆかりの古刹 清見寺が名所

旅人が薩埵峠を越えてほっと一息つくのが興津宿。西から来る旅人は峠越えの準備を進める場所でもあった。譜代大名や親藩大名は幕府の直轄地である二つ先の府中宿に泊まることが多かったため、わずらわしい付き合いを避けたかった外様大名は興津宿に泊まることが多かったという。

徳川家康は子ども時代、人質として駿府の今川家にいた頃、興津の「**清見寺**」で学問を学んだといわれている。東海道を往還した朝鮮通信使の宿泊や供応も行われ、それらの資料も残る。

奈良時代に開創した古刹「清見寺」
静岡市清水区興津清見寺町 418-1　TEL 054-369-0028

江尻宿

旅人を魅了した景勝地・三保松原

清水港がすぐ近く、と来れば海道一の大親分・清水次郎長。次郎長の生家や次郎長の船宿を復元した資料館「清水港船宿記念館 末廣」がある。世界遺産に登録された「**三保松原**」や、徳川家康を祀り全国の東照宮の始まりとなった久能山東照宮にも足を延ばしてみたい。

羽衣伝説の舞台としても知られる三保松原。世界文化遺産「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」の構成資産のひとつに登録されている

名物 構成文化財

追分羊かん

東海道から清水港へと続く道との分岐点（追分）に店を構えたことから、その名が付いた「追分羊かん」。３代家光の時代、箱根の山中で病にかかった明の僧を介抱し、その礼にと蒸し羊かんの製法を授かったことが始まりという。晩年を静岡で過ごした徳川慶喜も愛した江尻宿の銘菓だ。

追分羊かん本店　静岡市清水区追分 2-13-21　TEL 054-366-3257

府中宿（ふちゅうしゅく）

徳川家康ゆかりの駿府（すんぷ）城の城下町

府中宿は駿府城の城下町として栄えた宿場で、駿河国の宿場の中でも最も規模が大きかった。現在は静岡駅、静岡県庁、静岡市役所などが集まる県内の中心都市となっている。

十返舎一九の生家跡地は駿府城から徒歩五分ほどの「両替町」にある。地名の由来は徳川家康によって銀貨鋳造所（銀座）が設置されたことから。家康隠居後、この銀貨鋳造所は駿府から江戸に移転し、これが現在の東京の銀座の始まりである。城下町には他にも「伝馬町」「呉服町」など由緒ある町名が残るが、町の景色に府中宿の面影を探すことは難しい。

上／1989年に復元された駿府城の巽櫓（たつみやぐら）と遊覧船「葵舟」　左下／東御門と巽櫓の内部の展示室　右下／坤（ひつじさる）櫓は骨組みに釘などを使わない伝統工法で復元された
静岡市葵区駿府城公園1-1　TEL 054-251-0016

上／天守台発掘調査現場の見学ゾーン　右／駿府城公園内にある大御所時代の家康像。後ろは天守台発掘調査現場

江戸の歴史を感じるならば、何といっても駿府城。駿府は徳川家康が幼年時代、駿河・遠江（とおとうみ）・三河・甲斐・信濃の五カ国領有時代、そして晩年の大御所時代を過ごした地だ。城は天正十三年（一五八五）に普請を開始して築城された。寛永十二年（一六三五）の火災によりほとんどの建物が焼失し、櫓や門は再建されるが、天守は再建されなかった。現在、天守台発掘調査が行われており、遺構を見学することができる。また、平成時代に復元された巽櫓（たつみやぐら）、東御門、坤櫓（ひつじさるやぐら）の内部は駿府城の歴史や構造がわかる展示室となっている。令和五年一月には、新たに静岡市歴史博物館がオープン予定。家康の一生や東海道の歴史等、静岡市全体の成り立ちを振り返ることができる。

東海道の旅路は、川を越えるのに一苦労

府中宿を出て安倍川の手前に「安倍川義夫の碑」がある。

呉服町通りと七間町通りの交差点、東海道の道筋に立つ札之辻址の碑。地名の由来は幕府からの御触書（おふれがき）を掲げた高札場が設けられたことから

東海道中膝栗毛

府中

府中の遊郭で遊んだのち、安倍川の川越でかつがれる

三島宿で泥棒に遭い、懐が寂しくなった弥次さん喜多さん。府中宿は弥次さんの故郷なので、知人のところでどうにか金を工面し、二人は遊郭にしけ込んで飲めや歌えの大騒ぎ。安倍川の手前の茶屋で名物の安倍川もちをすすめられる場面も。安倍川では川越人足に声を掛けられる。「旦那がた、安くしますよ」「いくらだ」「昨日の雨で増水したので一人64文」「そいつは高い」「でもお客さん、川をご覧なさい」「なるほど、こりゃあ豪勢に水が流れている」。

そうして二人は肩車に乗って川を渡る。「ああ、ナンマイダナンマイダ」「しっかりしがみついていなされ」。ようやく肩車から降りて賃銭をやり、さらに酒代にと16文のチップも渡した。「へい、これはご機嫌よう」と川越人足は金を受け取ると、川上の浅い方をさっさと渡って帰るではないか。「おいらたちをわざと深いところで渡して、ふんだくりやがった！」

十返舎一九『東海道中膝栗毛』（国立国会図書館所属）より、府中の遊郭の場面

旅人の落とした財布を拾った川越人足（かわごしにんそく）が追いかけて手渡し、お礼を辞退。感動した旅人が奉行所に伝え、人足が褒美をもらったという逸話が伝わる。

江戸時代、安倍川には橋は架かっておらず、渡し船も使われなかったため、川越人足に先導してもらい徒渉（としょう）したり、肩車や輦台（れんだい）（※）に乗ったりして渡った。架橋されなかった理由としては江戸を防衛するためとも、夏季の増水期に耐える強固な橋を造る技術力がなかったからとも言われている。増水すると「川留め」となり、周辺の宿場町は潤ったが、旅人は旅程がずれ込むことを嫌い、大きな川の少ない中山道を選ぶ人も多かった。

広重「東海道五拾三次之内 府中 安部川」（静岡市東海道広重美術館所蔵）。輦台、肩車、徒渉など安倍川を様々な方法で渡る人々が描かれている

名物

静岡茶

宝暦6年（1756）、足久保茶（静岡茶のルーツ）が将軍御用を差し止められたことから地域の茶業は衰退。それを見かねた竹茗堂の初代が青茶の製法を取り入れ復興させたことが、現代まで続くお茶どころの始まりとなった。竹茗堂では現在9代目がその暖簾を受け継いでいる。

竹茗堂（ちくめいどう）　静岡市葵区呉服町2-4-3　TEL 054-254-8888

名物　構成文化財

安倍川もち

安倍川上流の井川金山を徳川家康が訪れた際、きな粉を砂金に見立て「安倍川の金な粉餅」として献上したことに因む「安倍川もち」。文化元年（1804）創業の「石部屋（せきべや）」の安倍川もちは、こしあんを絡めたあんこ餅と、きな粉と白砂糖をかけたきな粉餅の食べ比べが楽しい一品。

石部屋（せきべや）　静岡市葵区弥勒2-5-24　TEL 054-252-5698

※　川を渡る客を乗せる台

丸子宿（まりこしゅく）

上／広重「東海道五拾三次之内 鞠子 名物茶店」（静岡市東海道広重美術館所蔵）。とろろ汁を食べる二人連れは、弥次喜多に着想を得ていると思われる。坂道を行く男が手にする長い棒は、自然薯を掘るために使うもの
下／現在の丁子屋。2022年春、国登録有形文化財となる

とろろ汁「丁子屋（ちょうじや）」は広重の世界そのまま

安倍川を渡り、東海道は峠道にさしかかる。わざわざ峠を越えるのは、海沿いが断崖のためだ。峠の手前が丸子宿（鞠子とも書く）。東海道ウォーキングをする人ならここで「とろろ汁」を食べるのを楽しみにしている人も多いだろう。もちろん車やバスでのアクセスも至便。江戸時代、この辺りは良質な自然薯（じねんじょ）（山芋の一種）が採れたためとろろ汁が名物となり、峠越えの旅人から精が付くと喜ばれた。松尾芭蕉は「梅若菜丸子の宿のとろろ汁」という句を残している。

今も五軒の店がとろろ汁を看板料理にしており、そのうちの一つ「丁子屋」は慶長元年（一五九六）創業、現存する県内最古の飲食店だ。この店が有名なのは、茅葺屋根の外観が広重の「東海道五拾三次之内 鞠子」に描かれた茶屋そっくりだからである。十四代目の丁子屋平吉さんに話を聞いた。

「この建物は祖父が昭和四五年、広重の世界を再現しようと近所にあった江戸初期の農家を解体して移築したものです。祖父が築き、父がリレーのたすきをつないでくれた宝物。丁子屋の店舗ではありますが、丸子宿、ひいては東海道を行き交う皆さんの心の風景でありたい。そう思って二〇一八年、クラウドファンディングを募って屋根を葺き替えました」

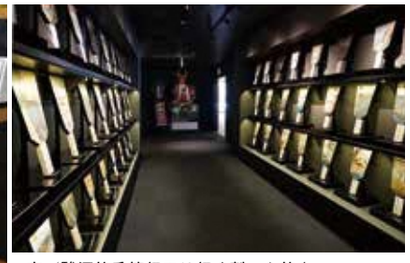
現在、丁子屋平吉さんは地域の人々と「丸子活性しょ～会」を結成して丸子宿の振興に努める他、日本橋から京都までの東海道沿いの老舗や名店をリレーのように繋いで紹介する「#宿場なう」という企画も発信。東海道の歴史や文化を伝える活動に力を入れている。

丁子屋の店内に併設する歴史資料館では、平吉さんの祖父が集めた東海道や江戸時代の旅に関する浮世絵、資料を展示している

「駿府の工房 匠宿」のエントランス。駿河竹千筋細工を使った照明が館内をあたたかく照らす
静岡市駿河区丸子 3240-1
TEL 054-256-1521

駿河の伝統産業と歴史に触れる

丁子屋から徒歩八分、「駿府の工房 匠宿」にも立ち寄りたい。陶芸、染物、駿河竹千筋細工（するがたけせんすじざいく）、木工指物、漆、蒔絵など静岡市の伝統産業にふれられる施設だ。工芸の創作体験ができる「体験工房」や、伝統工芸の歴史や職人技を紹介する「匠宿伝統工芸館」、セレクトショップ、カフェなども併設する。



左／駿河竹千筋細工は細く割った竹を丸く削いで作る「丸ひご」を使用する繊細な竹細工　右／広重の「東海道五拾三次之内」を蒔絵で描いた羽子板を展示

名物　とろろ汁

構成文化財

丸子地区では気候、土壌、水が適していることから、古くから良質な自然薯が採れた。丁子屋では現在、牧之原台地の農家と協力し、低農薬の土で育てた自然薯を使用。また、栄養価の高い「むかご」（自然薯の葉の付け根にできる球芽）を使った揚げ団子も提供している。

丁子屋　静岡市駿河区丸子 7-10-10　TEL 054-258-1066

丁子屋平吉さん。20代後半で家業を継ぐまでは和太鼓チームに所属し、公演で各地を回っていた。左は「#宿場なう」の紹介チラシ

東海道中膝栗毛

丸子

夫婦喧嘩が始まって とろろ汁を食べ損ねた弥次喜多

名物とろろ汁を食べようと茶屋に入った二人。「とろろ汁はありやすか」と聞くと、亭主は「へえ、いまできず」。弥次さんは「できない？困ったな」と思ったが、この地方の方言で「できず」は「できます」という意味。亭主が芋をおろし始めたので二人は待つことにした。亭主は「この忙しいのに何をしている。ちょっと来てくれ」と大声で女房を呼ぶ。すると奥の方から髪の乱れた女がブツブツ文句を言いながら出てきた。「なんだい、やかましい人だよ」「お膳を二つ用意しろ」「おまえさん、洗った箸はどこにあるのかね」「俺が知るか」といった具合に、支度をしながら言い合いを始める。亭主「うすのろめ」、女房「おめえの方がひょうろく玉だ」、亭主「言ったな！」とすりこぎで女房の頭をぽかり。女房も負けじとすり鉢を投げつけ、あたり一面とろろ汁。滑って転んで折り重なった。隣のおかみさんが「また夫婦喧嘩か」と止めに入るが、こちらも転んで三人ともとろろ汁だらけ。弥次喜多は「こりゃだめだ」と店を出た。『膝栗毛』ではとろろ汁を食べ損ねた弥次喜多だったが、広重は浮世絵で二人にとろろ汁を食べさせてあげているのがほほえましい。

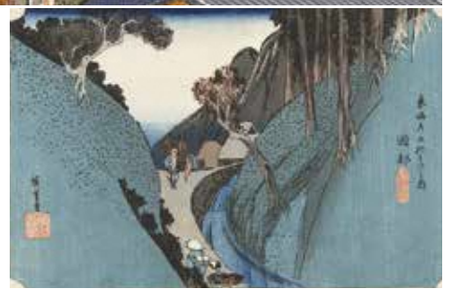
十返舎一九『東海道中膝栗毛』（国立国会図書館所属）より、丸子宿での夫婦喧嘩の様子を描いた場面

宇津ノ谷峠

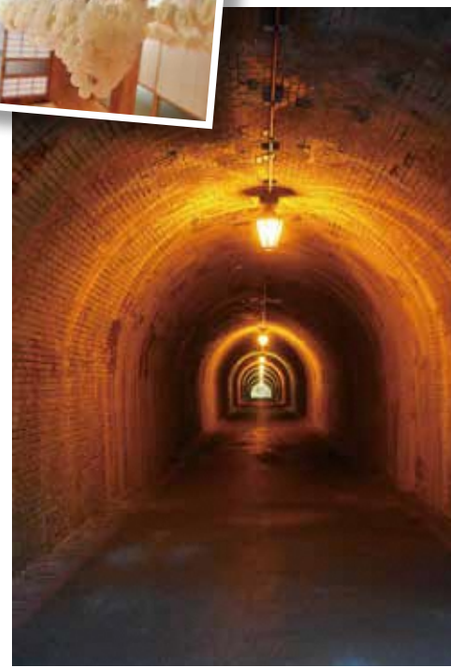
それぞれの時代の道が旅人を見守ってきた

丸子宿と岡部宿を結ぶのが「宇津ノ谷峠」。ここには古代から現代までそれぞれの時代で開通した道が残っている。「宇津」と聞いてまず想起するのは、『伊勢物語』で在原業平が詠んだ「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」。都を追われ、東国を目指して旅をする東下りの一節で、「駿河の宇津の山のあたりでは、その『うつ』の名のように、『うつつ（現実）』にはもちろん夢でさえ恋しいあなたに逢わなかったよ」と嘆いた歌だ。この峠には平安時代から「**蔦の細道**」と呼ぶ古道が通っていた。その後、豊臣秀吉が小田原攻めの際に開いた道が、江戸時代に東海道となって受け継がれる。そして明治時代に入ると勾配のゆるやかな道が築かれ、峠の部分にはトンネルが掘られた。大正～昭和初期に自動車が通れる幅員の広い道路と新たなトンネルが築かれ、昭和三四年には国道一号の交通量の増大に伴って山を貫く二車線のトンネルが築かれた。それに並行する形で平成十年にも二車線のトンネルが掘られ、現在ではそれぞれ国道一号線の上下車線として利用されている。

峠に古くから伝わる「**十団子**」は、旅人を襲う鬼を退治した伝説にちなみ、小さな団子を数珠状に糸でまとめたもの。魔除けや旅の安全を願う御守りとして人気があり、現在でも宇津ノ谷集落の**慶龍寺**で縁日に授与される。



上／峠の麓の旧東海道沿いにある宇津ノ谷集落　下／広重「東海道五拾三次之内 岡部 宇津之山」（静岡市東海道広重美術館所蔵）



上／旅人に人気があった十団子　下／「明治のトンネル」は明治９年（1876）に掘削され、明治37年（1904）に修復された。現役のトンネルとしては日本初の国の登録有形文化財。赤煉瓦とランプ型照明がレトロな雰囲気

東海道が開通するまでは多くの人が往来した「蔦の細道」

岡部宿

柏屋は岡部宿を代表する旅籠で、その規模から「大旅籠」と呼ばれた　藤枝市岡部町岡部817　TEL 054-667-0018

旅人の疲れを癒した宿場の旅籠

宇津ノ谷峠を越えると岡部宿。『東海道中膝栗毛』では、峠を越えた弥次喜多が宿引きに声をかけられ、「大井川が川留めでその手前の藤枝宿が満員だから、今日は岡部へ泊まりなさい」と言われたと書かれている。

岡部宿の見どころは、本陣跡に隣接する「**大旅籠柏屋**」だ。江戸時代、旅籠のほか質屋も営み、多くの田畑を所有し、岡部宿屈指の名家だった。現在の建物は天保七年（一八三六）築。現存する大旅籠は極めて少なく貴重であることから国登録有形文化財となっている。当時の旅籠の様子や旅道具などを学べる歴史資料館となっているので、見学してみよう。一階の入口すぐは、旅人が足を洗ったり大きな荷物を置いたりする「みせの間」。いわば旅館のフロントといった場所で、蔀戸（Ｐ８参照）や帳場の様子も見ることができる。急な階段を上ると、二階は庶民が泊まる客間。その奥の増築部分は展示室となっており、旅道具などが展示されている。

一階の土間を境にした西側の部屋は、武士が泊まる部屋。柏屋は近くに本陣があったため、その家来も利用した。庶民

上／「みせの間」で足を洗う弥次喜多の人形　下／明るくて広い武士の間

左／旅籠の食事例（レプリカ）。夕飯は汁物、焼魚または煮魚、野菜の煮物、漬物の「一汁三菜」　右／旅人が携帯した「紙算盤」。珠は紙、軸は糸でできている

名物

日本酒

県内最古の酒蔵「初亀醸造」は寛永13年（1636）に駿府城のほど近くで創業（のちに現在の岡部宿に移転）。地下50mを流れる南アルプスの伏流水を仕込みに用い、県独自の静岡酵母で醸したり、人気アニメ『ちびまる子ちゃん』とコラボしたりと、地域に根差しながら新しい日本酒造りを続けている。

初亀醸造　藤枝市岡部町岡部744　TEL 054-667-2222

の部屋の畳は畳縁（たたみべり）が無く織り目の粗い安価な「野郎畳」だが、武士の部屋は縁（ふち）のある畳が敷かれている。

柏屋の隣には「内野本陣史跡広場」がある。本陣の建物は残っていないが、敷地はそのまま残されており、建物間取りを地面に表示。街道の趣が感じられる門塀も再現している。

広重「東海道五拾三次之内 藤枝 人馬継立」（静岡市東海道広重美術館所蔵）。宿場の中継業務を行う「問屋場（といやば）」の様子。宿場は「宿駅」とも言い、この交通網（駅伝制度）はのちに郵便制度にも利用された。たすきをつなぐ「駅伝」という名称もここに由来する

藤枝宿（ふじえだしゅく）

「人馬継立（じんばつぎたて）」で描かれた交通の要衝の宿場町

藤枝宿は田中城（※）の城下町で、東西二キロにわたる規模を誇っていた。田沼意次（たぬまおきつぐ）の所領で塩の産地だった相良（さがら）（現在の牧之原市）に通じる田沼街道や、高根白山神社への参道・高根街道、瀬戸谷街道などへと続く交通の要衝。本陣などの建物は残っていないが、「上伝馬」「長楽寺」「下伝馬」などの部屋の畳は畳縁が無く織り目の粗い安価な「野郎畳」だが、武士の部屋は縁のある畳が敷かれている。

柏屋の隣には「内野本陣史跡広場」がある。本陣の建物は残っていないが、敷地はそのまま残されており、建物間取りを地面に表示。街道の趣が感じられる門塀も再現している。

当時の本陣の様子を伝える内野本陣史跡広場の門

宿場の町名が冠された一・二キロに及ぶ商店街が続いている。

広重が描いた藤枝宿は街道の交通・通信・運輸の様子を知る上でたいへん参考になる（上図）。副題に「人馬継立」とあるように、公用の貨物と旅客を宿場ごとに分担し、馬や人足で継走する仕組みだ。藤枝宿を過ぎるといよいよ「越すに越されぬ」と言われた大井川。弥次喜多の道中はまだまだ続く。

上／大慶寺にある「久遠（くおん）の松」は約750年前、日蓮上人が植えたと伝わる。樹高25m、根廻り7mの大木で、「日本の名松100選」にも選ばれている　右／藤枝市内には上青島地区・内谷地区などに東海道の名残を留める松並木が現存している

名物　構成文化財

瀬戸の染飯（そめいい）

東海道に面した上青島村瀬戸町（現・藤枝市上青島付近）の茶屋で、戦国時代から販売されてきたという「瀬戸の染飯」。もち米を蒸した強飯（こわいい）をくちなしの実で黄色く染め、薄く延ばして干したもので、旅人の足腰の疲れを和らげる補給食として重宝されたのだという。

千貫堤・瀬戸染飯 伝承館（資料展示のみ）　藤枝市下青島1006-3　TEL 054-646-0050

名物

藤枝茶

創業は寛政年間（1789〜1801）、藤枝宿の街道沿いで茶を商っていたという「真茶園」。8代目当主の松田真彦さんは、茶の目利きを競う第41回全国茶審査技術競技大会で優勝した経歴を持つ茶匠だ。「美味しいお茶は、茶の仕入れから」を胸に、お茶所・静岡の人々に親しまれている。

真茶園（しんちゃえん）　藤枝市茶町1-10-29　TEL 054-641-6228

※今川氏が築城し、滅亡後は武田氏と徳川氏の領土争いの最前線に。徳川家康が鷹狩りの際に度々滞在したことでも知られている。本丸を中心に四重の同心円を描いた形の城は全国的にも珍しい

東海道中膝栗毛

藤枝

喧嘩のあと仲直り（？）した爺さんに飲み逃げされた弥次喜多

藤枝宿の近くで、馬が跳ねたのに驚いた爺さんが、喜多さんにぶつかった。喜多さん、水たまりに倒れてしまう。「こりゃあ、ごめんなさい」「俺はおぎゃあと生まれた時から江戸城の金の鯱（しゃちほこ）を横目でにらんで、水道で産湯をつかった男だ（喜多さんは実際は江尻出身）。その俺をこんな目に遭わせて、ごめんで済むと思ったら大間違いだ」「はいはい、その江戸の水ならよかったが、今あんたが転んだところは馬の小便だまりだ」。喜多さん「なんだと！」。一触即発の二人を弥次さんが止めに入り、その場は別れた。そして二人は染飯が名物として知られる瀬戸へ。すると町はずれの茶店に、さっきの爺さんがいる。爺さんはうってかわって「先ほどは失礼しました。酒の勢いであんなことを言ってしまいました。お詫びのしるしに一杯いかがですか」。こうして酒盛りが始まったが、爺さん、便所へ行ったきり戻ってこない。喜多さんが店の人に「おい、勘定は」と聞くと「いいえ、まだいただいておりません」。

十返舎一九『東海道中膝栗毛』（国立国会図書館所属）より、田舎親爺と酒盛りをする弥次喜多

駿州の酒造り

お茶どころとして全国に名高い静岡県だが、各酒蔵が品質の高い日本酒造りを行っていることはご存じだろうか。駿州の日本酒造りの要ともいえるのが、富士川・安倍川・大井川といった一級河川。富士山や南アルプスの雪解け水が注ぎ込む豊かな水源と、南部・能登・越後などから招聘した杜氏の技により、昭和六一年の全国新酒鑑評会では出品された二一の銘柄のうち金賞が一〇、銀賞が七と、全国一の入賞率を記録。静岡県は「吟醸王国」とも呼ばれるまでになった。そして、現在でもその酒造りは脈々と受け継がれ、生産量こそ少なくとも質の高い日本酒が人々を唸らせている。

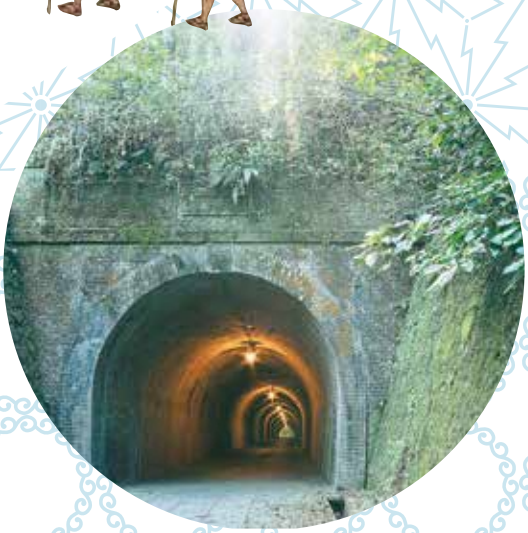
静岡市・藤枝市の酒蔵と主な銘酒

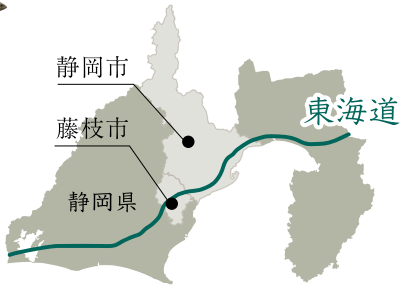
静岡市　神沢川酒造場（正雪）｜英君酒造（英君）｜三和酒造（臥龍梅）｜萩錦酒造（萩錦）｜駿河酒造場（天虹）｜静岡平喜酒造（喜平 静岡蔵）｜君盃酒造（君盃）

藤枝市　初亀醸造（初亀）｜杉井酒造（杉錦）｜青島酒造（喜久酔）｜志太泉酒造（志太泉）

駿州の旅
日本遺産
藤枝市 静岡市

旅の原点に出会えるまち、駿州





文化庁

発行　駿州の旅日本遺産推進協議会（藤枝市・静岡市）　編集　月刊「江戸楽」編集部　発行年月　2022年2月
令和3年度文化資源活用事業費補助金